

学校と保育現場で学生を育てる

# 貴校でデュアル教育を行うために あなたが考えるべき**五**つのこと

## 保育者養成施設

においてデュアル教育は  
どのように実現しうるのか？



平成30年度 文部科学省委託事業 専修学校による地域産業中核的人材養成事業  
現場実践基礎力を有した保育士養成のための「保育現場での活動」のガイドライン作成事業

日本児童教育専門学校編

本資料は、文部科学省の生涯学習振興事業委託費による委託事業として、学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校が実施した平成30年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果物である。

## 目次

1. はじめに .....	3
(1) 本資料の目的 .....	3
(2) 本資料の構成及び概要：あなたが考えるべき五つのこと .....	4
2. 【問 1】デュアル教育を導入するねらいは何か？ .....	6
(1) 日本版デュアル教育の背景と保育者養成 .....	6
(2) 【答 1】充実した初年次教育のため：プレ実習として .....	6
(3) 【答 2】実習とは別の視点から学生の学びを深めるため：就労を意識して .....	7
(4) 小括 .....	8
【ワーク 1】：デュアル教育を導入する前に考えておこう！ .....	9
3. 【問 2】デュアル教育を導入するにはどのような準備が必要か？ .....	10
(1) デュアル教育を導入する目的を共有する .....	10
(2) 目的を共有する連携企業・法人等を探す .....	10
(3) 地域の実情に即した活動の計画を立てる .....	11
【ワーク 2】：あなたなりの計画を立てよう！ .....	11
【表 1】：デュアル教育導入までの大まかな工程表 .....	13
(4) 小括 .....	14
4. 【問 3】どのようにデュアル教育を学生に説明するか？ .....	15
(1) 学生にねらいを十分に認識させる .....	15
(2) 【例 1】デュアル教育をプレ実習として行う場合 .....	15
(3) 【例 2】デュアル教育を課外活動として行う場合 .....	18
(4) 小括 .....	19
5. 【問 4】デュアル教育を通じて学生の学びをどう変えるか？ .....	21
(1) 初めに書くことありき、ではなく… .....	21
(2) 徹底して観ること・メモを頼りに考えを深めることで学ぶ .....	21
(3) 観るべき視点や力点を与える：“Step by Step”という仕組みについて .....	22
【表 2】：“Step by Step”質問項目のサンプル .....	23
(4) 小括：想定され得る反論に答える .....	24
6. 【問 5】デュアル教育で保育者養成は変わるか？ .....	26
(1) 変わる .....	26
(2) 変わらない .....	26
(3) あなた自身はどう考えるか .....	27
7. おわりに .....	28

(1) 再び、デュアル教育の意義は何か？ .....	28
(2) デュアル教育で変わる・変える現代日本の保育者養成 .....	28

## 1. はじめに

### (1) 本資料の目的

本資料は「貴校でデュアル教育を行うために、あなたが考えるべき五つのこと」と名付けられた、一種のマニュアルである。本資料の目的は、デュアル教育を導入する専修学校向けに、デュアル教育とはどのようなものであり、特に保育者養成施設においてデュアル教育はどのように実現し得るのか、を整理した形で示すことである。実際に専修学校においてデュアル教育を導入しようと考えている人々に対して、或る種の見取り図を提示することをねらっている。

デュアル教育とは何であり、それが保育者養成施設においてどのような意味を持つのかに関しては次章以降の本文で詳細を述べるが、予め見通しをつけておきたい。

\* \* \*

デュアル教育とは、ドイツに代表される職業人育成を強く意識した教育制度を指し、職業実践の場と学校とで協働的に学生を育てることを特徴としている。学校単体での教育ということではなくて、学校と職業実践の場との二元体制(独：duales System)の教育ということで、デュアル教育と一般的に称される。

本家ドイツにおいては、学生でありながら、職業実践の場で実際に働き、賃金を得ながら、学業に勤しむスタイルが標準的である。このように書くと、「それってインターンシップのことでしょ？」あるいは「なんだ、アルバイトのことか？」と思われた読者もいるかもしれない。我が国においても、インターンシップであるとかアルバイトであるとか、学生が職業実践の場に行ってさまざまなことを体験する機会は既にある。ただし、本資料で扱うデュアル教育は、次の二点で大きく異なっている。

第一に、デュアル教育は、半期あるいは一年程度の中・長期的なスパンで行われることを基本とする。これまでの職業教育において職業実践の場に赴くというのは、単発の学校行事的に行われるか、長くても一週間程度のスパンで行われるというのが主流であったように思われる。それと比してデュアル教育において職業実践の場に赴く期間が長いのは、単なる職業体験活動ではない意味合いがあるからだ。デュアル教育では職業実践の場そのものが、いわば、“もう一つの学び舎”なのである。

第二に、デュアル教育では、理念上、労働に対する対価としての賃金報酬が発生すると共に、教育活動として構造化されている。この点は、アルバイトとデュアル教育における職業実践の場での活動(「企業内実習」等と称されるもの)との違いでもあるが、デュアル教育においては、教育の範疇に報酬が発生する労働が組み入れられていると理解される。

こうしたデュアル教育の必要性が提唱されている背景には、若者の就労意欲の問題があ

る。我が国では、2000年代初頭に、「ニート」や「フリーター」という言葉で若者の労働意欲が低下していることが強く叫ばれ、問題視されていた。こうしたなかであって、若者の就労意欲を高めるための施策という意味合いを帯びながら、日本版のデュアル教育が高等専門学校を中心に進められていく。中学・高校での職業教育の一環として、職場体験が広く知られ、大学等の高等教育機関においても就職活動専門のサポート体制や窓口が設置されるなどの動きが活発化したのは周知のとおりである。

このように若者の就労意欲の問題を背景とする我が国と、マイスター制度以来の伝統を受け継ぐ本家ドイツとでは、一言でデュアル教育といっても大きな違いがあることは認めざるを得ない。つまるところ、現代日本においては、若者の就労意欲の低下に対する、或る種のカンフル剤としてデュアル教育は位置づいており、そのことは日本版デュアル教育に大きく影響しているようにも思う。

いずれにしても、保育者の離職率がこれだけ世間的にも注目されている昨今においては、保育者養成施設がデュアル教育を導入するというのはそれなりにインパクトのあることなのかもしれない。この点については次章において詳しく述べたい。

## (2) 本資料の構成及び概要：あなたが考えるべき五つのこと

本資料は、本章以降、次のような五つの章が続く。それぞれがデュアル教育を導入しようとしている、あなたに考えてもらいたい重要な問いである。予めその意図を示しておく。

「2.【問1】デュアル教育を導入するねらいは何か？」では、あなた自身がデュアル教育とは何であるかを理解した上で、それを保育者養成施設に導入するねらいが何なのか、明確にすることを目的とする。「デュアル教育」という言葉を初めて見聞きした読者には、まず本章を一読されることを奨めたい。デュアル教育の持つ射程がどの程度のものであるか、概括的に理解されることであろう。

「3.【問2】デュアル教育を導入するにはどのような準備が必要か？」では、実際に、保育者養成施設の専修学校にデュアル教育を導入するに当たって、いかなる準備が必要であるかを整理する。具体的にデュアル教育を始めたいと思ったときに、どのような手順で何をどうすればいいのかを理解していることが、あなたが所属する専修学校におけるデュアル教育の成否に大きく影響するであろう。本章をもとに各校において入念な準備を進めていただきたい。

「4.【問3】どのようにデュアル教育を学生に説明するか？」では、二つの典型的なパターンに即して、デュアル教育が実際にどのように学生に対して説明され得るか、を示したい。あなたが所属する専修学校においては、どちらのパターンに近いかを見極めつつ、本章に示すものを参考に、各校の実態に即して、適切なプログラムへとカスタマイズしていただきたい。

「5.【問4】デュアル教育を通じて学生の学びをどう変えるか？」では、第一の問いとも関連するが、学生がデュアル教育を通じてどのような力を身に付けるのか、学生

が日頃の学びをいかに充実させるのか、というのをより具体的に考えてみたい。筆者は、デュアル教育を通じて学生の学びは大きく変わると考えている。この点については、本章において詳述するが、学生が学ぶことに意味を見出す仕掛けとしてもデュアル教育は有効そうである。

「6.【問5】デュアル教育で保育者養成は変わるか？」では、この問いに対する二つの答えを検討する。

すなわち、「変わる」あるいは「変わらない」である。本章は、所属する専修学校において同僚に向けて、あるいは、連携を目論んでいる企業・法人等のプロジェクトに参画される保育者に向けて、デュアル教育とは何かをどう伝えるか、を再確認することを目的としている。いずれの場合でも、筆者なりの理由付けを示している。参考にしつつ、あなたなりに意見を構築し、より説得力のある説明ができるようにしていただきたい。

#### 【付記】

なお、本資料は、平成30年度に文部科学省より委託された、現場実践基礎力を有した保育士養成のための「保育現場での活動」のガイドライン作成事業の成果に基づくものである。当該委託事業において作成されたガイドラインについては、ウェブサイトにおいて公開されている。本資料はこのガイドラインに基づくものではあるが、かなり取捨選択して観点を絞った記述となっている。「保育現場での活動」及びデュアル教育について、さらに理解を深めたいという読者には、上記ガイドラインについても併せて一読することをお奨めする。

平成31年3月1日

安部 高太朗

日本児童教育専門学校 専任講師

## 2. 【問 1】デュアル教育を導入するねらいは何か？

### (1) 日本版デュアル教育の背景と保育者養成

第1章において既に部分的に述べたことだが、デュアル教育の本家ドイツとは異なり、日本においては、若者の就労意欲の向上という使命がデュアル教育に付託されている。保育者養成施設の専修学校版のデュアル教育にこれをそのまま当てはめるならば、デュアル教育を導入するねらいは、就労意欲の高い学生、すなわち、保育者になろうとする学生の意欲を高め、実際に保育者として社会に送り出す、ということになるであろう。就労3年後の離職率が高いともいわれる保育業界において、就労意欲の高い学生がそのまま保育者になるなら、大きな変革を齎す<sup>もたら</sup>可能性はある。

しかしながら、他方で、専修学校の専門職養成に特化した性格に鑑みるならば、そもそも専修学校を進路として選択して入学する学生の就労意欲が、一般の大学生のそれと比して、著しく低いとは考えにくい。専修学校は、或る専門職養成に特化した教育を行うことを前提としているのであるから、そこに入学する時点で、当該の専門職になることを学生は念頭に置いているはずであろう。その意味では、一般の大学生よりもむしろ専修学校の学生のほうが就労意欲は高いのではないかとも思われる。無論、不本意入学層は一定程度いることは間違いないが、それでも総体としてみるならば、そもそも専修学校において養成が企図されている専門職(例えば、保育者養成施設なら、保育者)として就労することを入学する段階で入学希望者が意識していない、とは思えない。

加えて、保育者養成課程に関していえば、職業実践の場における学びの機会が、既に保育実習として組み込まれている。職業実践の場での実習がない分野ならば、デュアル教育を導入する意義はわかりやすい。養成のカリキュラム上にこれまでなかった、職業実践の場での学びの機会を確保する、というだけで十分に意義深いものとなるからである。保育者養成の場合には、この職業実践の場での学びの機会を確保するという点でも、既に保育実習があることを踏まえると、これをデュアル教育独自の意義だというのには無理がある。

したがって、我々がまず考えなければならないことは、基本的には保育者という進路選択を前提としているはずの学生に対して、しかも、保育実習がある保育者養成施設で学ぶ学生に対して、デュアル教育を導入することの意義である。日本版デュアル教育が強調している、学生の就労意欲の醸成という目論見は、率直に言ってしまえば、専修学校における教育の特性からすれば、入学段階での必要条件というべきものである。それでもなお、専修学校においてデュアル教育を行う意義があるのであろうか。我々はこの地点から考えなければならない。

### (2) 【答 1】充実した初年次教育のため：プレ実習として

第一の「答え」は、デュアル教育を保育実習と積極的に関連付ける方向で保育士養成課

程上に位置付けるという路線である。

多くの保育士養成施設においては、保育実習に先立って、保育実習時に役立つような活動を導入していることであろう。ここではそれを総称的に「プレ実習」と呼んでおくが、このプレ実習としてデュアル教育を行うことも可能である。というのも、保育実習時に学生が抱える不安には、具体的な保育現場の様相がイメージできないということに起因するものも少なくないからである。

例えば、子ども同士のけんかの仲裁をどうやっていいのか、わからないという点に不安を抱えている学生がいるとする。この場合に学生が求めているのは、けんかの仲裁一般に関わる手順なのであるか。おそらくはそうではあるまい。むしろ、けんかの個別具体的な場面で学生自身がどうふるまえばいいのかわからないからこそ、一般論を踏まえていたとしても不安なのである。そうだとすれば、事は単に学校の授業で済まされるものではなくなる。この学生には、実際に子ども同士のトラブル場面に遭遇し、自分なりに葛藤しながら、関わるという経験そのものが必要のはずである。

上記の学生が求めるような経験は、保育実習でこそ経験すべきことではないのか、という声が聞こえてきそうであるが、実際に実習においては、もしも子ども同士のトラブルが起こった場合にはそれなりの対応を実習生にも求められることが一般的ではあるまいか。仮に上述のトラブルの場面において、実習生がどう対応してよいやらあたふたしていたとしたら、指導担当の保育者からは「突っ立っていないで、子どものフォローに回るとか何かしてほしい」と内心で思われ、反省会では「もっと積極的に動いてもいいかもしれませんね」ということを言われて終わってしまうであろう。つまり、多忙感を極める現場においてなされる保育実習では、こうした一つ一つの事象について実習生が考えながら関わるほどの余裕はないのが普通であり、それゆえに実習前に或る程度のことのできる暗に求められる、というのが実情であるように思われる。それゆえ、学生はこのような不安を抱えるわけである。

こうした不安はすぐさま解消されるものとも思われえないが、一つだけ確かにいえるのは、実際に経験をすることなしに、この種の不安が解消されることはない、ということである。そのためには、実習ほど、学生に負荷をかけず、かつ、保育が行われる場所を確保することが重要になってくる。学生が実習前に、いわばリアリティ・ショックを軽減するための時間として、プレ実習が位置づけられるならば、それは実習とつながりつつも、学生が考えて行動に移すまでの時間を確保できるような工夫が必要であろう。そのためには、受け入れる保育現場においても活動の目的が共通認識されていなければならない。この点については次章において詳述する。

### (3) 【答 2】 実習とは別の視点から学生の学びを深めるため：就労を意識して

第二の「答え」は、デュアル教育に独自の意義を持たせるという方向性を強め、保育士養成課程上に位置づけつつも、就労を意識した活動として捉える路線である。

ただし、これは第一の「答え」と背反するものでもない。

というのも、そもそも保育所等での保育実習が保育士資格取得の試金石という位置づけであろうし、保育所等の保育士が働く場所において実際に力を発揮し得るか、就労後もやっつけていけるか、という点での或る種の見極めをつける機会とも考えられるからである。実際、保育実習を機に、その保育所に就職するという学生の例は決して珍しくはない。これが意味するのは、少なくとも実体験として、保育所で働くという具体的な見通しがつけられる場所の一つが、実習先の保育所となることがほとんどということでもあろう。それだけ保育実習において関わりを持つ保育所とは縁が深くなる可能性があるということでもある。

ただ、だからといって、保育実習は就職を前提としたものだと見做せるかということ、そうとも限らないであろう。あくまでも保育実習は、保育士資格取得の要件であり、資格付与が可能かどうかを見定めるためのものである。第二の「答え」が独自の路線を進む理由もここにある。それは、保育実習では必須の実習日誌等の記載を重視するのではなく、別の観点から、例えば、保育現場で働くことを実体験として得ることに重きを置いたものにもできるからである。

とりわけ、東京近郊の保育所であれば、保育補助として学生が保育(の補助的な業務)に関わることは一般的になっている。こうした保育補助として学生が入る時間をうまく活用することで、保育士養成課程と背反することなく、デュアル教育を実現させることもできるのではあるまいか。その場合には、授業科目との積極的な関連付けがなされることが前提になるものと思われる。この方向性で見れば、既にどの保育士養成施設でも積極的に取り組んでいるであろう、保育に関連したボランティア活動とも重なる部分が大いかもしれない。そのためにはどのような準備が必要であるのか、これも緻密に計画を練っておく必要があるが、この点は次章において詳述したい。

#### (4) 小括

本章においては、デュアル教育を保育者養成施設の専修学校において導入する意義について考えることを念頭に、デュアル教育の提唱背景、保育士養成課程上の特色を確認したうえで、二つの方向性を示した。

第一には、デュアル教育を或る意味では積極的に位置づけるもので、プレ実習としての側面を併せ持たせるという方向性である。

第二には、デュアル教育独自の就労意識という点を引き取って、それに就労意欲の涵養に特化した活動として位置づける方向性である。

上記の二つの方向性は必ずしも背反するものではない。いずれの場合にしても、デュアル教育というこれまでの保育者養成の在り方にはなかった教育の仕組みを導入するのであれば、それ相応の目的意識を醸成しておくことが肝要だ、ということである。本章のまとめとして、次に掲げるワークにぜひ取り組んでいただきたい。自ずと、あなた自身がデュ

アル教育の何に期待を持っており、それをどのような形で実現させていこうと考えているのかが、わかるようになってくるであろう。

**【ワーク 1】：デュアル教育を導入する前に考えておこう！**

<p>Q1. あなたは、デュアル教育のどのような点に興味を持ちましたか？</p>
<p>Q2. 貴校においてデュアル教育が必要な理由は何でしょうか？ (デュアル教育を導入することで改善が見込まれる教育上の課題は何ですか？) ※箇条書きでいいので、課題を列挙してみましょう。</p>
<p>Q3. あなたはデュアル教育をどのように貴校に導入しようと考えていますか？ ※なるべく具体的に考えましょう。科目との関連性、学生層、学校の立地…等の観点から具体的に導入していく姿をイメージしてみてください。</p>
<p>Q4. あなたの考えを、貴校の同僚に対して、どのような説得力のある言葉で伝えますか？ ※学校全体として賛同を得ることが必要です。どうして必要なのか、現状の課題や論点に対して、デュアル教育に取り組むことで何がどう改善されそうなのかを具体的な言葉にしておきましょう。</p>

### 3. 【問 2】デュアル教育を導入するにはどのような準備が必要か？

#### (1) デュアル教育を導入する目的を共有する

前章においても強調した点であるが、第一にすべきことは、デュアル教育を無条件に保育士養成課程に位置付けることではない。まずもってなされるべきことは、あなたがデュアル教育を貴校に導入するに当たって、何をねらいとし、何を改善しようとしているのか、少なくとも同僚全体と共通認識を構築しておくことである。

重要なのは、貴校にデュアル教育が必要だとあなた一人が思うことではない。あなたの同僚が納得して、デュアル教育に取り組む必要性を感じ取り、賛意を示すことである。

もし仮に、同僚からの賛同が得られなかったとしたらどうしたらよいのであろうか。

残念ではあるが、そのような場合には、デュアル教育を導入するには時期尚早だと云わざるを得ない。無理に押し通したとしても失敗することが見越されるのであるから、そのような場合には現状でのデュアル教育の導入は諦めたほうがよい。

読者の中には、このようなことを読まされるとは思いもしなかったと感じた方もいることであろう。ただ、事実は上記の通りである。保育者養成をあなた一人でやっているのなら話は別だが、おそらくそのようなことはあり得ない。それに、同僚の教職員すら納得ができないようなことを学生にやらせてみせようと思うのは、よろしくない。

といって、筆者は、全会一致の賛同を得ないといけないとも思わない。むしろ、こうした機会に、貴校において何が課題であるか、何をどうすれば改善するか、虚心坦懐に議論がなされるならば(その場合には、デュアル教育は二の次でもいいと云えなくもないが)、これほど意義深いことはない。

だから、あなたが掲げるデュアル教育の導入目的が極めて明確で、それが貴校の現状として課題になるものを改善することに資するのか、あなたが伝えようとしていることは説得力があるか…こうした点を今一度吟味していただきたい(不安な方は、9頁のワークの内容を見返しておこう)。結果として、デュアル教育が導入されるに至るかどうかは、貴校が抱える課題に対して、デュアル教育の有効性がある場合のみだと考えられる。したがって、強い目的意識がこの教育の導入には必要となるのである。

#### (2) 目的を共有する連携企業・法人等を探す

もはや目的に関して云うべきことはないかもしれない。しかし、学校内だけで賛同が得られたとしてもデュアル教育は導入しえないことも改めて確認しておく。というのは、その教育形態の特質上、デュアル教育は、保育に関する実態的な活動をさせてもらえる場所(以下、「保育現場」と称する)があり、そこにいる人々がデュアル教育上の目的に関して、共通認識を持ち、賛同していることが前提になるからである。当然のことながら、こうした保育現場においてデュアル教育の目的が理解されないならば、うまくいくはずがない。

逆の視点から捉えてみると、あなたは同僚の賛同を得たうえで、その目的に見合う連携可能な保育現場を提供し得る企業や法人、または公的機関等を探すべきである。デュアル教育で求められる保育現場について述べるなら、必ずしも株式会社の運営する保育所がよいとか、公立保育所で行うことだとか、一概に云えるものでもない。

例えば、東京都内にも、区立保育所での無資格者の保育補助を求人として出している行政区はある(新宿区、杉並区など)。こうした保育補助の経験を教育活動と関連させることで、より質の高い保育者養成を目指す、ということであれば、公立園とのデュアル教育も可能になるであろう。

いずれにしても重要なのは、保育現場との共通認識の構築であり、これには十分に時間をかけて説明を行うことである。保育現場にいる保育者にとっても、デュアル教育という試みは耳慣れないものであろうし、そもそも「実習生でもない、よくわからない人」が保育現場に入ることそのものに抵抗感を示される保育者もいないではない。極めて慎重かつ丁寧な説明を行い、関係性を構築したのちに、デュアル教育の導入を図るべきである。

### (3) 地域の実情に即した活動の計画を立てる

目的意識の醸成に時間をかけるとしても、具体的にどのような計画でデュアル教育の導入を目指すことができるのであろうか。この点をより具体的に記しておきたい。

まずは、あなた自身の考えを整理するところから始めよう。

## 【ワーク 2】：あなたなりの計画を立てよう！

### (1) デュアル教育を導入する目的及び貴校における教育上の課題

#### 【目的】

(例)：保育実習とは異なる視点で保育現場に入り、子どもと関わる経験を積むことで、保育実習時により質の高い学びを学生が得られるようにすること。

#### 【デュアル教育を導入することで改善が見込まれる課題】

(例)：「保育実習」という言葉への抵抗感が強く、挫折する学生が多いこと。

(2) デュアル教育をどのような形態で進めるか	
<p>A) 授業との関連性を高く設定</p> <p>(例)：</p> <p>プレ実習科目の「保育実習一步前」という独自科目(1年次後期、2コマ連続、4単位)において、「保育現場での活動」という名称で保育現場に週一回伺い、初歩的な関わり、保育への参加を学ぶ。</p>	<p>B) 基本的には授業外の活動として設定</p> <p>(例)：</p> <p>実習終了後の2年次後期に、授業後の放課後の課外活動として設定する。ただし、全10回のうち3回分は、「保育内容総論」での授業回数3回分としてカウントする(コメントシートを持参させ、後日提出をもって出欠確認を兼ねて評定を付ける)。その後、「保育内容総論」の授業においてふり返りの時間を1コマ設ける。</p>
(3) どのような保育現場と連携するべきか	
A) 貴校の立地や地域性に見合っているか	
B) 貴校のデュアル教育導入の目的を理解してもらえそうか	
C) 受け入れてもらえる学生数の枠はどのくらいになりそうか(受入枠が足りるか)	
D) 総括的にどういう保育現場と連携が可能か	

上記の【ワーク 2】を埋めたら、具体的な話を貴校の教職員で共有しながら、議論を深める。一通り、議論を尽くしたうえで、デュアル教育の導入に概ね賛意を得られたら、実際に連携し得る保育現場を探すことが必要になるであろう。

具体的な工程としては、以下のようなものが考えられる。

【表 1】：デュアル教育導入までの大まかな工程表

手順	手順に係る期間	要点
自分自身の考えの整理	1 週間程度*1。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目的を明確にする。</li> <li>・何をどう改善しようと思っているのかわかるようにする。</li> </ul>
貴校の教職員での議論	2～3 ヶ月程度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・丁寧に論点を整理していく。</li> <li>・目的の共通認識ができるまでは時間がかかる。</li> <li>・一度の会議ではなく、複数回に亘って、議論を重ねる。</li> <li>・授業等の関連があれば、保育士養成課程上問題がないかも確認する。</li> </ul>
連携する保育現場の確保	3 ヶ月程度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目的を適切に伝え、共通認識の構築を図る。</li> <li>・受入枠がどのくらいかを必ず確認する。</li> </ul>
	年度を跨いで…	
参加学生への説明 (+ α : 学生の準備)	1～2 ヶ月程度*2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(プレ実習であれ、課外活動であれ)保育実習との違いを判然とする形で示す。</li> <li>・デュアル教育で目指されるべきものが何か学生自身が認識する。</li> </ul>

\*1：じっくりと計画を練ってもいいが、或る程度固まったら、同僚に相談してみたほうがいいのではないと思われる。

\*2：この前までの工程で、導入前年度が終わっていることが前提である。導入年度に行うのは、学生への説明から、としたほうがいい。授業等を使って丁寧に説明するとして、少なくとも3ないし4回程度は説明に時間を要するであろう。

上記の【表 1】のように準備を入念に進めるとすれば、最低でも、導入したいと思って半年程度は準備に全精力を傾けることが要求される。長いと思われるかもしれないが、これでも随分と工程を簡略化させているほうだと考えてもらってよい。

【表1】の工程が長いと感じられたかどうか、いずれにしても、これだけ入念に準備をしなければ、デュアル教育という耳慣れない教育形態は理解されえないということは忘れずにいていただきたい。

#### (4) 小括

本章においては、デュアル教育の導入にどのような準備が必要か、という問いに向き合った。端的に云えば、デュアル教育の導入には何よりも優先して、どのような目的でデュアル教育を導入するのかの共通認識を構築することが重要である、ということである。

デュアル教育のより細やかな導入に関しての工程は、ウェブ上で公開されているガイドラインを参照いただくとして、本章を締めくくるにあたり、申し述べておきたいことがある。

それは、保育実習と、デュアル教育との関係性である。おそらく、読者諸賢においては、これまでの話を総合すると、デュアル教育として保育実習を行う可能性はないのか、と訝しまれたかもしれない。実のところ、本委託事業においても暗に保育実習をデュアル教育として行う可能性を加味していなかったわけではない。しかしながら、これには、まだまだ課題があるというのが筆者の率直な感想である。それは、主として保育士養成課程上の制約があるからということにはなるが、何よりも、本家デュアル教育で行われているような賃金報酬の問題を絡めると、授業内で行っていくことの困難さが浮き彫りになっている。念のため申し添えれば、日本版デュアル教育は、賃金報酬を前提とはしていない。あくまでも、教育の場所が二元的な体制であり、かつ、就労意欲の涵養というのを目論んでいたというのが、日本版デュアル教育の特質だからである。

デュアル教育と保育実習を関連付けられるか否かについては、現代日本の法制度上の整備と、保育士養成課程そのものの有機的な連関が構築されていくまではしばらく課題として残っていくことが見越される。したがって、貴校においてデュアル教育を導入することを検討する際には、最終的に、保育実習との差異をどう描くか、という点で苦慮することが予見される。その点を踏まえて、入念な準備を進められたい。

#### 4. 【問 3】 どのようにデュアル教育を学生に説明するか？

##### (1) 学生にねらいを十分に認識させる

前章までにおいて、デュアル教育の目的意識を醸成し、その共有を図ることの重要性を述べてきた。本章においては、こうした目的意識が共有されたうえで、学生がどのようにデュアル教育に取り組むことが可能であるのか、という話に転じる。

前記の【表 1】でも示したが、学生がデュアル教育とは何かというのを理解するのはかなり困難であろう。それよりも彼ら・彼女らにとって重要なのは、これが保育実習ではないが、保育現場に行く活動である、ということの意味である。つまり、保育士資格の取得のための保育実習ではないのに、どうして保育現場に行くのか、その意味は何なのか、これが全く理解されないとすれば、ここまでの入念な準備が水泡に帰してしまうだろう。

すなわち、学生にとって認識されるべきは、保育実習との違いである。

これについては、もう少し具体的な目的に即して説明を加えよう。以下、二つの例を挙げている。一つは、デュアル教育をプレ実習として行う場合に、学生に何を認識させ、何に気を配るようにいうのか、というものである。もう一つは、デュアル教育を課外活動として行う場合を想定している。こちらは課外活動という性質上、或る程度、学生の自主性に依拠する部分が大きくはなるであろうが、それでも学校はデュアル教育として課外活動に関わる意義や必要性は明確にしておくべきである。以上の二例を典型的なパターンとしつつ、貴校においてデュアル教育をどのように導入するかが決したら、学生に対する説明をどう行うかを考えてみよう。

##### (2) 【例 1】 デュアル教育をプレ実習として行う場合

第一の例として、デュアル教育をプレ実習として行う場合について取り上げる。

おそらく多くの学生が疑問を持つのは、例えば、次のような点である。

- プレ実習を行う意味は何か？
  - プレ実習って何をどうするのか？
  - プレ実習で学んだことって何に役立つのか？
- プレ実習と保育実習は何が違うのか？
  - 学びの視点が違うことの意味はあるのか？
  - そもそも違うことをする意味があるのか？
- プレ実習と保育実習はどうつながるのか？
  - 保育実習とプレ実習が違うならば、どうしてつながりがあるのか？
  - つながるとしても 1 年生からやることなのか？(現場がわからないのは怖いし、もっと座学をしっかりとやってから現場に行ったほうがいいのではないか？)

- どうしてデュアル教育としてプレ実習を行うのか？

上記の疑問に対して、あなたならば、どう答えるであろうか。

「いやぁ～うちの学生はこんなこと訊いてこないよ」と思った読者もいるかもしれない。学生が表立って訊いてくるかどうかは、ここではそれほど問題ではない。逆に、これらの疑問に答えられないようであれば、デュアル教育としてプレ実習を行おうという目的や意図がブレているか、判然としていないことが予想される。

もしも筆者なりに先の質問に答えるならば、次のようになる。無論、これが「正解」だと示す意図もないし、参考にならないかもしれない。あくまで考えることのヒントとして気軽に眺めて頂けるとありがたい。

- プレ実習を行う意味は何か？

- … **プレ実習は、保育実習でよりよく学ぶための準備。**

- プレ実習って何をどうするのか？

- … あなたが〈保育現場をいかに知らなかったか〉を知るために保育現場に行くことである。子どもに接してみても、戸惑うことや困ることも大いにあるはずだが、同時に、それゆえにこそ、保育の現場がとても魅力的なものであることも感じ取るはずだ。保育者は「子どもがかわいい」という想いだけで務まるものではないが、「子どもはやっぱりかわいい」とも思えるのではないか。

- プレ実習で学んだことって何の役に立つのか？

- … 学校で習えば何でも〈すぐに役立つ〉と思いつくのはよろしくない。もっと豊かに思考してみてほしい。例えば、あなたが、ダイエットしたいと思っているとしよう。「3日で15キロ痩せられる薬。お値段3日分で6万円」なんて広告がついたサプリメントがあったとしても、あなたはきっと買わないだろう。即効性というのは、文字通り、劇薬である。プレ実習は、ダイエットに喩えれば、ストレッチ運動を週に一回開始する程度の効果だろう。しかし、いきなり毎日10キロ走るよりは良いのではないか。

- プレ実習と保育実習は何が違うのか？

- … あまり変わらない。が、よりサポート体制を入念に構築したうえで、保育現場には送り出すので安心してほしい。どんなにがんばっても間違いがあるだろうことは先方も想定済みである。加えて真面目に答えると、あくまでもプレ実習では、基礎的な観点を身に付けると思ってもらったほうがいい。

- 学びの視点が違うことの意味はあるのか？

- … 基礎的な観点を話続けると、あなたは、まだ、そもそも保育現場で何をどう見たらいいのか、という観点を身に付けていない状況である。水泳の練習でビート板を使って、息継ぎ練習から始めたように、プレ実習は実習の基礎・基本になりう

るものを集中的に学ぶ時間。保育現場で何を見るべきか、というのがわかっているのとそうじゃないのとでは全く学びの質が異なる。「いや、感性で見極めるから、とりあえず行ってみることが大事じゃないの?」と思ったキミ。〈子どもが泳げるかどうかわからないけど、とりあえず、プールに飛び込ませてみる〉だろうか?文字通り、もがきながら学ぶことになると思うけど、順番追って練習したほうがよいのではないか。

➤ そもそも違うことをする意味があるのか?

… これまで述べた通り、部活動などでやる基礎練には基礎練の意味があるというのと一緒。

● プレ実習と保育実習はどうつながるのか?

… 〈基礎・応用〉という区分で見ると、プレ実習が基礎で、そこで学んだことを応用しながら保育実習でより実践的に保育のことを学ぶと捉えればよいと思う。

➤ 保育実習とプレ実習が違うならば、どうしてつながりがあるのか?

… 確かに。「違うっていったじゃん」と思ったのだね。たとえば、日本のお城は、石垣の上に建てられているけど、あんな感じと思えばいいかもしれない。確かに、石垣そのものと建物そのものは別物だけど、石垣の上にしっかりと乗っているから「城」としての意味を成すわけでしょう。それに、それぞれが違うというのは、何も別に、それらがつながらないということは意味しない。〈石垣+建物〉という総合したときに「城」という意味が生じたように、〈プレ実習+保育実習〉で「保育者としての成長」という意味が生じるのだと思う。

➤ つながるとしても1年生からやることなのか?(現場がわからないのは怖いし、もっと座学をしっかりとってから現場に行ったほうがいいのではないか?)

… その気持ちはごもっともだ。ただ、実習のスケジュール上、1年次にしないとどうにもまわらないという実態もあるんだ(プレッシャーを感じていたら、申し訳ない)。ただ、キミが考えるように、座学で全体的なことを学んだからと云って、保育現場で起こることの全てに対応できるようになるということではないから、そもそもそういう認識だったら改めてほしい。わかってからやったほうが失敗しないだろうし、失敗が怖い、というのがキミの気持ちでしょう?それはそうだけど、キミは、補助輪を外した自転車に初めて乗ろうとしたとき、一度も転ばずに自転車に乗れることを期待したかな?

● どうしてデュアル教育としてプレ実習を行うのか?

… これまでのプレ実習はあくまでも保育実習を薄めていった感じと言える。だから、実習日誌を書く練習をしたり、絵本の読み聞かせの練習をさせてもらったりすることがメインだったとも捉えられる。「デュアル教育」というのは、学校が準備して現場でお試させてもらうというよりかは、学校でも保育現場でも学ぶということで、それらが関連していくことが重要なのだ。例えば、学校で手遊びの練習をして保育現場に

行くというパターンもあるけども、保育現場で疑問に思った感染症のことを「子どもの保健」の授業の時に先生に質問して学びを深めるというパターンもある。こういうのを双方向で学びが生じるように、構造的に行えないか、というのが「デュアル教育」(二元体制の教育)と呼ばれる理由だ。保育実習で、こういうことができればいいのかもしれないけれども、いろんな制約があって、なかなかそうもいかないという実情があってね。だからこそ、プレ実習でやっているということもあるんだ。

上述のような想定問答ができるくらいまでに内容が突き詰められていて、目的がクリアであれば、学生に対しても納得してもらえる説明ができるのではないか、と思われる。

もちろん、上記のような問答を実際にやる必要があるとは思わない。が、少なくとも、学生が保育現場に入るに当たって抱える不安や悩みを或る程度先回りしつつ、対処しておく準備をすることは重要だろう。そのためには、授業において何を伝えるか、精選していくことが求められる。それは、授業科目内での設計を一から見直すことになるかもしれないが、学生の意味のある学びのためには避けて通れないことでもある。

### (3) 【例2】デュアル教育を課外活動として行う場合

第二の例として、デュアル教育を課外活動として行う場合について取り上げる。こちらも学生の想定問答を考えてみる。

- 「課外活動」なんだから自由にやってはだめなの？
  - どうして学校が関わるの？
  - 結局、授業なの？
- 授業の単位とデュアル教育で行う課外活動はどう関係するの？
- お金(賃金報酬)はもらっているの？

こちらはややお金と学生の自由という点に絞って見たが、どうであろうか。あなたなら、どう答えるだろうか。

- 「課外活動」なんだから自由にやってはだめなの？
  - … 自由って言葉の意味にもよるけれども、仮にそれが〈好き勝手に〉という意味なら、大きな誤解が生じているようだ。幸か不幸か、キミのうしろには常に「〇〇保育専門学校」という見えない看板がついてまわっている。もちろん、自立して課外活動として、保育補助の仕事を探して、自分で働いて…ということを否定するつもりはない。自分で責任をきちんととることができるなら、むしろ、自主的にそうした活動を行うのは好ましいとさえ思う。ただ、キミが望むと望まざるとにかかわらず、「〇〇保育専門学校の学生さん」という見方をする人は一定数いて、その結果、それがキミだけじ

やない他の学生にも影響を与えうることは想定しておいてほしい。

➤ どうして学校が関わるの？

… というように、「〇〇保育専門学校」の学生」とどうしたって見られる可能性があるのだから、それは学校が関わったほうがいいでしょう？それは、キミたちを一つの型に嵌めようとしているわけではなくて、学校としてもできるだけのことをして、キミたちが自主・自立的に活動できる応援をしたいと思っただけのことだ。

➤ 結局、授業なの？

… 学校が関わるから、単なるアルバイトとか、単なるボランティアではない部分はあるのは確かだ。ただ、授業として、つまり、課外活動で行ったものを授業単位取得の要件として認めるかどうかは学校によって判断が異なる。

● 授業の単位とデュアル教育で行う課外活動はどう関係するの？

… 「〇〇保育専門学校」では、「保育実習一歩前」という基礎科目の授業3回分を「保育現場での活動」という課外活動として保育現場に行き行って学ぶことで読み替える、ということを行っているよ。だから、この場合は、課外活動を休んだら、授業単位が出るかどうかに関わるということになる。授業単位に関しては学校によってどういう取り決めをするか異なるから、キミの授業担当の先生によく聞いておくこと。

● お金(賃金報酬)はもらっていいの？

… 「ボランティア」として行う場合には難しい。最近では、インターンシップにおいて学生にタダ働きをさせるということが問題視されていることもあって、受入側で「謝金」というような形でご用意くださることもあるかもしれない。迷ったら学校に電話して状況を相談してほしい。

「アルバイト」として行う場合は、先方とキミが契約を結ぶわけだから、それに基づいた正当な対価として受け取ることができるはずだ。

「課外活動」としてデュアル教育を導入する場合には、上記のような点がクリアになっていなければならない。

なお、ウェブ上で公開されている、ガイドラインの「標準カリキュラム」では、授業と関連付ける方向性(プレ実習)を主としているが、それでも学生を受け入れる企業・法人等の連携する保育現場とは協定書等を交わすことを推奨している。詳細はガイドラインを参照していただきたい。

#### (4) 小括

本章においては、一種の想定問答を通じて、デュアル教育をプレ実習として行うのか、デュアル教育を課外活動として行うのか、二つの典型的なパターンに即して、学生に対する説明がいかになされうるかを説明した。

いずれの場合においても、学生に対して何をどのように伝えるのか、授業上の工夫が待

たれるところである。この授業の工夫は、各校において取り組むなかで見出されていくものと思われるが、ガイドライン上に示されている授業科目間の連携等は参考になるはずである。その点も踏まえて、よりよい授業の構成を行っていただきたい。

## 5. 【問 4】デュアル教育を通じて学生の学びをどう変えるか？

### (1) 初めに書くことありき、ではなく…

前章において、学生にデュアル教育をどう伝えるか、というのは或る程度の想定がついたものと思われる。本章においては、デュアル教育そのものを通じて得られる学生の学びの変化ということに話を展開したい。

そのためにまずは前提的に、保育現場における手書き文化に触れなくてはならない。

保育者養成においては、手書き文化が未だに重視される傾向にある。実習日誌然り、手書きのメッセージ・カード然り。他方で、多くの実習生が直面するのは、こうした手書き文化での文書作成の困難さである。彼ら・彼女らは、別に文字が書けないわけでもなければ、いわゆる「コミュ障」と呼ばれるような社交性がない人たちばかりというわけでもない。彼ら・彼女らが書けない理由は明白である。

すなわち、何を書いていいのか、わからないのだ。

普段の彼ら・彼女らは、“今どきの学生”らしく、TwitterなどのSNSで自らの心境を思いのまま吐露している。寡黙というよりは、むしろ、「饒舌」なくらいである。こうした彼ら・彼女らが、なぜ実習日誌を前にすると沈黙するのであろうか。それは、実習日誌で求められる内容は、日々の「呟き」ではないからである。“今どきの学生”が苦戦するのは、思ったことを適切な形に整えて書き記すことであり、何を伝えるべきか取捨選択することである。

### (2) 徹底して観ること・メモを頼りに考えを深めることで学ぶ

だからこそ、保育実習はじめ、保育者養成校で書くことを徹底するというのも一つの方策なのかもしれない。だが、こうした方向性は少なくとも筆者から見ると、うまくはいきそうに思えない。それはまるで音痴な人に「みんなの前で一曲歌い終わるまで帰ってはいけません」という一昔前にはありがちだった、あの光景と同じにおいを感じるからかもしれない。書くことそのものに苦痛を感じているのだから、書いていくことで克服するというのは荒療治と云うべきだろう。

ここで提案したいのは、視点を決めて徹底的に観ること、メモを頼りに考えを深めることの二点である。

第一に提案した、視点を決めて徹底的に観る、というのは、デュアル教育において保育現場に入るに当たって、学生が自分なりに観るべきポイントを構築する、ということである。観るべきポイントを構築する上で役立つのは、具体的な〈問い〉である。例えば、保育環境はどうだったか、では茫漠としているが、3歳児クラスで子どもが遊んでいたおもちゃを具体的に三つ以上挙げよ、であれば、“今どきの学生は”はかなり詳細に観ることができる。

第二に提案した、メモを頼りに考えを深める、というのは、次のような事情を踏まえたものである。それは、“今どきの学生”は他人様に見られるものだと緊張し、臆して書けなくなるが、自分しか見ないものなら書くことをそこまで忌避しないようだということである。自分が思ったこと・考えたことは、思いついた瞬間、すぐどこかへ行ってしまうものである。まして、保育現場に入ったその日に何を感じ、何を思ったかなどということは、すぐにメモでもしない限りは、さっと忘れ去られてしまうであろう。

上記の二点をうまく仕組みに昇華させるという試みを我々は行ってきた。すなわち、それが“Step by Step”というウェブシステムであり、それをを用いたふり返りである。

\*\*\*

### (3) 観るべき視点や力点を与える：“Step by Step”という仕組みについて<sup>1</sup>

- “Step by Step”というウェブシステムによる意味あるふり返りへ

ふり返りにおいて“今どきの学生”に感想を求めるのは野暮である。彼ら・彼女らは空気を読んで「楽しかった」とだけ云って済ませようとするであろう。そもそも感想を聞いたところで何もふり返ったことにはならない。ふり返るためには、具体的で、かつ、答えることが容易な問いがなければならない。

保育という営みは紋切り型で子どもに対応していればよいわけではない。時々刻々と変わる子どもの様子・子ども同士の関係性等々を見極めつつ、適切な距離を保ちながら関わる保育者が介在した保育環境の中で子どもは遊びを通して学ぶ。だからこそ、保育者はこうした子どもの様子の変化に敏感でなければなるまい。そのためには、物事を漫然とではなく、かなり具体的に観ることも必要である。その工夫が具体的な問いである。

これをふり返りに応用しようというのが、“Step by Step”の目論見であった。

- システム上の工夫：即時的に問いに答える／問いを通じて考える

“Step by Step”の工夫は、上記の意味あるふり返りを実現させるように、ふり返りの時間に使えるものとするためのものであった。一言でそれを表現するなら、〈学生とそれを指導する保育者が共通の問いに対して答える〉というものである。基本構造を次頁に示そう。

---

<sup>1</sup> 本節と次節は、『成果報告書』に収められた拙論と同一のものであることを付記しておく。

【表 2】：“Step by Step”質問項目のサンプル

質問項目	学生	質問項目	現場活動担当者
わからないこと・判断に迷うことをそのままにせず、質問することができた。	<input checked="" type="checkbox"/> Yes ・ No	学生は一つ以上質問をしていた。	<input checked="" type="checkbox"/> Yes ・ No
依頼された業務が終わった後に「ほかに何かできることはありますか」と言えた。	<input checked="" type="checkbox"/> Yes ・ No	学生は依頼した業務だけをやるのではなく、自分からできることを探そうとしていた。	<input checked="" type="checkbox"/> Yes ・ No
相手が質問してもいい状況かを考えたうえで話しかけることができた。	<input checked="" type="checkbox"/> Yes ・ No	学生が保育者に対して質問をするタイミングは適切なものであった。	Yes ・ <input checked="" type="checkbox"/> No
言われたことを忘れないように、メモを取ったり、復唱したりなどの工夫をした。	Yes ・ <input checked="" type="checkbox"/> No	保育者が教えたことを忘れないような努力（メモを取る・復唱する等）を学生はしていた。	Yes ・ <input checked="" type="checkbox"/> No
今日の活動を振り返って（現場の保育士の方にいただいたコメントなどを記そう）			

ふり返し時には、“Step by Step”を使う。“Step by Step”上ではまずは学生が【表 2】の一番左の列にある四つの質問に〈Yes・No〉の二択で答えていく。学生が答え終わると、画面が変わり、今度は「保育現場での活動」担当者（以下、現場活動担当者）が答える番になる。そのときに表示されるのは、【表 2】の左から三つ目の列に表示されている四つの質問である。既にお気づきと思われるが、これらの質問は学生が答えるものと現場活動担当者が答えるものとそれぞれの視点を共有している。これらを使ったふり返しでは、〈Yes・No〉と答えることそのものに意味があるわけではない。むしろ、そのあとが重要である。

“Step by Step”上には【表 2】のように、両者の答えが一覧で見られる画面が用意されていて、それに基づいて具体的にふり返ることができる。例えば、【表 2】に示すように、学生は「相手が質問してもいい状況かを考えたうえで話しかけることができた。」に対して〈Yes〉で答えたのに対し、これに対応する「学生が保育者に対して質問をするタイミングは適切なものであった。」に現場活動担当者が〈No〉と答えたとしよう。

例えば、学生としては現場活動担当者の A 保育士に話しかけようとしたが、B 保育士と話している最中だったので終わった直後に話しかけたので、邪魔にはなっていなかったはずだと考えているとしよう。これに対して、当の A 保育士は、荷物を運びながらずっと B 保育士と子どもの様子の報告を聞いており、やっと下せるぞというタイミングで学生に話

されたことを問題に思っているとしよう。

一般的なふり返りで考えられるのは、仮にこの件に関して何かコメントがあったとしても、「質問はいいのだけど、タイミングをよく見てね」と保育士から学生が言われて終わりではないだろうか。

“Step by Step”でのふり返りでは、まず共通の視点でなされる質問に対して答えが割れたところを中心にふり返ることにしている。その際、なぜ〈Yes〉と思ったのか、あるいはなぜ〈No〉と思ったのか、それぞれの判断基準を明示し合うことを重視している。

ここにおいて、やっと学生は自分なりに気を配ったことを現場活動担当者に伝えることができるし、現場活動担当者も学生が考えなしに話しかけてきたわけではなかったことがわかる。そのうえで、今度は具体的にどうすればいいのか、がやっと話せるはずである。ここまでくれば、“今どきの学生”にとっても自分のことを受け止めてもらいつつ、きちんと指導をしてもらったという実感が得られるであろう。

- “Step by Step”を e-portfolio として活用する可能性：便利なメモとして

“Step by Step”がねらったのは、こうした意味のあるふり返りであって、単なる保育の ICT 化ではない。例えば、連絡帳をアプリケーションソフトで作成して、タブレット端末から共有するというような保育の ICT 化はユーザー・フレンドリーな操作性にすぐれた機器が開発されれば、すぐにでもできるであろう。ただ、それは過剰な事務作業量を減らすことにはつながらない。むしろ、やっていることを紙に書くか、機器で残すかの違いに過ぎない。こういう部分的な ICT 化では却って保育現場が混乱することが予想される。

“Step by Step”は、根本的にこれまでの保育現場における学び・ふり返りを変えようとしたものである。ついでに ICT 化を見越したに過ぎない。ただ、これはここ 10 数年で一気に全国の大学等の高等教育機関においては進展してきた、e-portfolio の流れに棹差すものにもなるであろう。保育士養成施設のなかでも専修学校においては、こうした e-portfolio が必ずしもうまく導入されていないところもないではない。これには先に記した、紙でやっていることを単に機械化しただけではないか、という思い込みもあるのかもしれない。

いずれにしても、これからは保育士養成施設の専修学校においても e-portfolio を活用して学修を管理していく流れは不可逆的であろう。そのなかにあって、保育実習や保育現場に行った学びの成果をうまく記録に残していくことは重要な課題のはずである。“Step by Step”という仕組みはその点でも、即時的に結果が見られるようにしており、かつ、いつでも通信環境さえあれば、ふり返った内容をコメント機能で残せるようにしている。その意味では、e-portfolio との整合性や親和性というのがシステム開発上の今後の課題となるのかもしれない。

#### (4) 小括：想定され得る反論に答える

本章の締めくくりとして、最後に、上記の質問に即してふり返りをするという“Step by

Step”には、学生の学びの視点が制限されないか、という質問・反論が投げかけられることがあるので、それに答えておく。

ごく簡単に答えるなら、“今どきの学生”像からすると、少なくとも自由にやったほうが却って学生はふり返ることに不自由になるのではないか、というのが筆者の回答である。仮に現場活動担当者が「思ったことを自由に話してくれていいのよ」と云ったところで、学生からすれば何を感想として述べるのが求められるのかを慎重に選び取ろうとするだけであろう（本当に思いあたった、とんでもないことを云ってしまう学生も少なからずいるのかもしれないが）。結局、何か疑問に思うようなことがあったとしても別の当たり障りのない話題に関して話してごまかすか、「とっても勉強になりました」という空虚な言葉を笑顔で云うか、その程度のことがなされるだけである。

それでは学生に何も残らない。それよりかは多少の制限があることは承知で、しかし、制限があるからこそ集中して、具体的に、かつ、省察的にふり返りを行ったほうがまだ良いのではないか、と思われる。無論、現状の“Step by Step”等で使われている質問項目にも不備はある。こうした不備をひとつひとつ丁寧に改訂していくことが今後の課題となるであろう。

## 6. 【問 5】デュアル教育で保育者養成は変わるか？

### (1) 変わる

前章に示したように、“Step by Step”を用いたふり返りが一般的になるならば、かなり保育者養成の在り方を変えていくであろうし、それは、学校のみならず、保育現場こそが、保育者養成の場であるというデュアル教育の原義に最も近い意味合いで変わることが想定される。

したがって、筆者としては、「デュアル教育で保育者養成は変わる」というのが基本的な路線として考えていることである。

ただ、これは何も現状の保育者養成の在り方に不満があり、すぐに変えるべきだと主張したいということではない。保育の手書き文化は、それこそ長い伝統の中で育まれており、手書きで行うことも意味もあるように感じられる。個人的意見として、手書きでないと愛情がこもっているわけではないとか、手書きだから味があってよいとか、そういうことを主張しようと思っているわけではない。しかし、同時に、保育者が忙しい職業になって久しいのだから、手間を省けるところは省くという流れの中で、保育で使う教材や玩具がすべてレディ・メイドになっていくのもどうかと感じている。それは事務作業量の省力化とは別儀と見做すべきではなかろうか。わざわざ考えないといけない時間(間)があったという意味では、手書き文化が残ることで、一呼吸置きながら考えて文章を作る間、子どものことを思った教材作製等ができる間が担保されるのは、それはそれでいいような気もする。

加えて、保育者に注がれる視線は一昔前と比べて随分変わったのかもしれないが、旧態依然としていると云えなくもない。例えば、男性保育士に対する(冷ややかな)視線、保育を「子どもを見ているだけの仕事」や、もっとひどいと「子どもと遊べる仕事」という見方は、依然として根深く残っているようにも感じられる。一言で云えば、それは保育者・保育に対する偏見なのだが、こうした見方を変えていくのは容易ではない、ということを示しているのかもしれない。

こうしたなかであって、単に養成の在り方を少し変える程度では何も変わっていないようにも思われる。デュアル教育は一種のカンフル剤と見做しうるが、同時にその影響・効力を過剰評価しないようにすることも重要であろう。

### (2) 変わらない

上記のことを踏まえると、デュアル教育を導入したから、すぐに何かが大きく変わるわけではない、という見方もできる。保育者養成の在り方が変わる理由は、教育方法の革新というよりかは、外部的な要因(政治的な情勢等々)に起因しているという伶俐な見方も成り立つだろう。事実、そのようにも思える節がある昨今の政治状況であるから、その点は反論しない。

しかしだからと云って、保育者養成の教育方法が変わらないでいることが常にいいことであるとは限らない。時代の状況に即して、保育者の望ましい姿を常に問い直すことが不可欠であり、それはどうしても変化を受け入れることにつながらざるを得ない。

問題は、その変わり方であろう。

デュアル教育は、その意味では、大きな契機となりうると見越される。

ただ、その変化の方向性まで見定めることは現時点ではできない。したがって、慎重を期して、現行の在り方を尊重するという方向性だってありえなくはない。

### (3) あなた自身はどう考えるか

結局のところ、デュアル教育で保育者養成は変わるか、という問いに答えるのは私ではなかったようだ。つまりは、あなた自身が答えを見出さねばならないということである。変えたいけど、変わらないかもしれないし、変えたくないけど、変わるかもしれない。いずれにしても、貴校において、デュアル教育を導入するということは、現状、抱えている何らかの課題に対して、一種の解決策を試みることにもつながるであろう。

その方向性が「正しい」ものかどうかは、当事者である、あなた自身が考えなければなるまい。あなた自身が悩んだ末に、同僚に提起するならば、耳を傾ける人だっているものである。

## 7. おわりに

### (1) 再び、デュアル教育の意義は何か？

本書全体を通じて記したこと、読者に伝えたかった点を最後にまとめておきたい。

一言で云えば、それは、デュアル教育が提示する、学校と保育現場が協働的に学生の学びの場を確保し、連携していくという方向性は大変好ましいものだが、それには入念な準備と目的意識の共有を大前提としている、ということである。

今日の保育者養成に対してのインパクトを挙げるならば、何よりも学生の学びの視点を変える可能性を踏まえないわけにはいかない。初年次にプレ実習として行った学生たちは、実際に保育実習に入る中で、プレ実習時に双方向で学んだことを生かすことができるであろう。他方、実習終了後などの時期に、課外活動的にデュアル教育を行った学生には、保育実習とは別の視点で、保育現場で働くということを意識した学びがなされるはずである。

デュアル教育と一言で云っても、その様相は実際には随分と多様化しそうだ。

### (2) デュアル教育で変わる・変える現代日本の保育者養成

だからこそ、筆者はデュアル教育で部分的にであれ、保育者養成は新しい方向へ動き始めると考えている。ただ、それがよいものとなるか、よくないものとなるのか、今の段階では正確な判断はできないであろう。それぞれの保育者養成を担う専修学校において、現状の課題に向き合い、必要があれば、デュアル教育を導入すればいい。

ただ、こうした歩みは少しずつ加速していくのではないか、という予感もある。序盤から飛ばすマラソンランナーにならないか、不安がよぎらないでもない。

読者諸賢におかれては、第一走者たちが暴走しないよう見つめつつ、よかったらぜひ一緒にこの長い道のりを走ってみてほしい。きっと参加者が多ければ、レースは盛り上がるはずだ。

平成 30 年度 文部科学省委託事業

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

現場実践基礎力を有した保育士養成のための『保育現場での活動』のガイドライン作成事業

貴校でデュアル教育を行うために、あなたが考えるべき五つのこと

学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校（事業責任者 小林 光俊）

---

発行年月日 平成 31 年 3 月 1 日

発行 小林 光俊

編集 阿久津 摂

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 1-32-15

学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校

電話 03-3207-5311 FAX 03-3205-1785





